

道草のすすめ

ながれ

澤 順子 (さわ じゅんこ / 保育士)

コロナのせいで日常が変わった、早く元にもどりたい、自由に人と会えて、ハグも普通にできる世界が戻ってほしい。今までどおり出かけたね、いっぱい好きなことがしたいねと友人とメールすることもある。でもこの2か月の自粛生活のなかで今までと違う世界が出来てきたような気がする。

私のいる郊外の団地は敷地が広く、休校になった子どもたちが毎日壮大なかくれんぼをしている。上は中学生から下は年長児まで、午後のある時間になると、どこからともなく沢山の子どもが現れてかくれんぼが始まる。「三密」を避けた屋外での遊びだから大人はだれも注意できないし、賑やかな声が響くのも大目にみているのもわかる。集まってはすぐ散り、ひたすら走り回る。学校があるときには一緒に遊ぶことがなかった子たちが、部活もテストも習い事もなくなって野に放たれている。大きい子は小さい子をカバーし、小さい子も泣いてもすぐに泣き止んで大きい子たちの遊びをまねしている。それは久しく見たことのない光景だ。子どもたちは一定時間になると、「また明日ね」とそれぞれのうちへ帰っていく。けんかすることもあるが、あってもすぐにみんな忘れて走り回る。なにかすべてが原点に帰ったような日々が続いている。

公立保育園定年後、別の保育園で働いているが、今(5月現在)は緊急事態宣言を受けての休園で自宅待機中だ。(医療職や流通などの子どもは預かっているの、正規の保育士さんたちは交代で出勤している。)長く仕事を休んでいると、子どもたちの顔や

職員の顔が浮かんで来て懐かしくはなるが、では復帰が全面的に嬉しいかと問いかけると、そうとも言えない自分がいる。

今勤めている保育園も慢性的な人手不足で勤務はなかなか厳しいが、職員はいつも前向きに働いていて気持ちがいい。保育園はどこも保育の目標や「子ども像」を打ち出していかななくてはならないのだが、この園も素晴らしい理想をかかげている。経営する企業が作った目標なので園独自で現場が考えたわけではない。いわく、他者に寛容であり、自分も努力し、グローバル社会で活躍できる人間を育てる、というものだ。パートの面接を受けた時に「素晴らしい目標ですね」と施設長に言ったら、「お恥ずかしい限りです。内容は全くともなっていないので暖かい目で見守ってください」と言われ、それにも心を動かされて数年をこの施設で過ごしている。

コロナ禍で、医療だけでなく流通・介護・ごみの収集など、社会を実際に支えている職種の人たちへの注目が高まってきた。そういう仕事によって自粛生活が快適に支えられてきたが、保育の仕事も同じく、やはり底辺を支えていく仕事だ。緊急事態宣言が出される直前まで、勤務先の保育園でも保護者はいつも通り子どもたちを登園させ仕事についていた。子どもが発熱しても、翌日には「熱は下がったので大丈夫です」と連れてくる。コロナであろうがなかろうが、大丈夫というのは子ども自身の言葉ではない。なんとなく体調が悪いというのは大人なら言葉に出来るが、子どもはぐずっ

たり機嫌が悪かったりすることでしか表現できない。基本は保護者が仕事に行くために預かる施設なのだから、子どもの都合より大人の都合が優先する場所なのだ。

コロナに関して言えば、子どもたちが泣いたりくっついたり抱っこされたりして、一日中過ごすのが保育園という場所であり、いわば「三密」のかたまりのようなところだ。「濃厚接触」が完全に避けられた状態では、小さい子の発達には保証されないことは発達の専門家なら誰しもがわかっている。保育園というのは、子どもの成長を最優先にした上で、どのようにしていくことが一番リスクを小さくするのかを常に試行錯誤していかなければならない、高度な専門性が必要とされている場所なのだ。

しかし、ここ十年余りで、保育園は「顧客第一」のサービス業に変貌し、顧客である保護者の要望にいかにかたえていくかに重点を置くようになった。勤務する園の「グローバル社会で活躍できる人間」という保育目標にしても、子どもの為ではなく保護者の理想・願望に応えたものでしかない。子どもの育ちをどう保障していけばそこにつながるのかという道筋が示されていなければ、絵にかいた餅どころか毒にもなりかねない。今の園でも、専門の講師がやってくる日は1~2才の子でも英語の「授業」を受ける為に室内で待機している。雨続きのあとのやっと外に出られる日であっても「授業」が優先する。「残念だね。今日は絶好のお散歩日和なのにね」と保育士は影で言っている。私が復帰を手放して喜べないのは、この状態を見聞きし、考えることが多いからだ。

待機児対策として行政は保育園を増やしていくが、慢性的な人手不足は解消してい

ない。毎日の忙しさに加え、会社や行政の方針に沿って、顧客である保護者の理不尽な要望にも応えていくのが今の現場なのだ。子どもの真の成長にとって何が必要なのかを自分の頭で考える時間を与えられず、日々の仕事をこなしていく保育士が、数年で退職していくのは当たり前のように思う。そして保護者もまた被害者でもある。子育ては外注するものだから、「よりいい施設」に預けることが親の責務を果たしていくことだと勘違いさせられている。

そして今、コロナによる突然の自粛生活で一日中子どもと向き合うことになった保護者は、ややこしくて一筋縄ではいかない子どもの感情に、心をすり減らしながらもなんとか工夫して日々を乗り越えていかななくてはならなくなった。サービスを受ける「顧客」としてではなく、主体としての保護者として、何かに気づいたかもしれない。そうだといいなと心から思う。

川べりを散歩する日課が続いている。若い父親が小さい子と散歩したり、ボール遊びをしたりする姿をこの2か月間、毎日見てきた。道端の草に目をとめてじっと見ていた子どもが母親に、「ねえ、すごく楽しいねっ」と呼びかけているのを聞いたこともある。

いつかコロナが収束し、子どもたちが今を振り返る時、「暗く長いトンネルだった」とだけ思うだろうか。私にはそう思えない。なにか大きな力を獲得したかもしれないとさえ思う。急いでしなければならないことが何もない、急がなくてもいいのだ、ということに気づけば、怖いものはなにもない。保育の世界も少しだけ変わっていくことを期待しながら、私もまた仕事につくことにしている。